

那近代外國關係)の論著があり、已に相當に研究が進められてゐる。兩氏共にこれらを參考せられたやうに見えないのは甚だ遺憾である。博引傍證は多とすべきであるが餘りに表面的にして、内面的考察を缺けるは兩者共通の弊である如く考へられる(妄評多罪(三國谷生))

● Joseph Vogt, Römische Republik, Freiburg im

Breisgau, 1832.

本書は H. Rinke, H. Junker, G. Schmirer 三氏の監修する Geschichte der führenden Völker 全三十巻中の第六巻として上梓されしもの J. Wolf 氏の手になるべきローマ帝政史の姉妹篇たるべきものである。オクタヴオ、本文三三二頁、圖版九葉、參考書目録一一頁、索引六頁よりなる。ローマ共和史については、既にニープール、モムゼン、フレツロ等の名著あるも夫等は皆浩瀚にして著者のローマ共和史のオリエンテールンクそのものを理解することすら容易でない。本書はイタリルの先史時代よりアウグストゥスのプリンケツプス政治確立迄のローマ史概説を目的としたものであつて、隨つて各事實に就いて精緻を缺くは言ふ迄もないが、著者のローマ共和史概観の仕方については決して凡ならざるものを示して居る。先づ本書の構成をみるに、次の四部に分たれて居る。

I. Teil, Geographie und historische Grundlagen S. 1—

23.

II. Teil, Die Republik und Italien. S. 24—73.

紹介

III. Teil, Die Republik und die Mittelmeerwelt. S.

74—165

IV. Teil, Die Republik und die Welt Herrschaft. S.

166—332

第一、第二兩部はローマ共和制確立前のイタリ人の文化及共和制成立より紀元前三世紀半に至るローマの政治的發展を概説したものであるが、此處にあつては先人の概説と特に相違あるを窺ない。第三、第四の二部はカルタゴ戦役よりアウグストゥスのプリンケツプス政治確立迄の概観である。カルタゴ戦役、東方ヘレニズム世界討伐を経て地中海世界を併呑するによつて起された政治的、社會的、その他文化一般に亘る變化過程をローマ精神とヘレニズム精神との或は融合に於て、或は對立に於て考察したものが第三部及び第四部である。我々は本書によつて著者が共和制ローマの發展を römische Kultur の發展時代と römisch-hellenistische Kultur の發展時代とに分たんとするを知るのである。この時代區分は共和制ローマの研究者にとつて大いなる問題を提供したものと嘗へやう。此區分が果して正しいか否か、又この區分が許されるとせば大體何時頃を以て時代轉換期とするか等については、尙事實の精密なる論證考察を必要とするであらう。蓋し本書は簡單にローマ共和史を概観せんと欲する者にも、ローマ共和史のオリエンテールンに就いて考慮ある者にも一讀さるべきものであらう。(井上)